

1. 実施方法

- (1) 原則として、所定のCD-R又は録音テープを校内放送施設・設備を通して再生する。再生は国語の試験開始直後に行うものとする。
- (2) 校内放送施設・設備が完備していない場合及び故障、又は停電などの場合には、他の試験会場の妨げにならないように配慮の上、各検査場を巡回し、テープレコーダーにより再生するものとする。
なお、巡回等のため国語の試験開始直後に第一問題が一斉に実施できない場合には、他の問題から先に行うよう、監督者が受験者に指示すること。

2. CD-Rに収録してある内容

ただ今から、放送による問題を行います。 (2秒おく。)

問題冊子を開き、1ページを見なさい。 (3秒おく。)

中学校1年生の中村さんは、ある自然学校の体験学習から学んだことについて発表しようとしています。
これからその発表を放送します。聞きながら、メモを取ってもかまいません。そのあと、下の問一から問三に答えなさい。
なお、放送はすべて一回だけです。

それでは中村さんの発表に入ります。 (3秒おく。)

私は、「命のつながり」というテーマで、実際に、生きたニワトリを絞めて肉にし、食べるまでの過程を体験してきました。実習では、講師のおじいさんが、子供の頃の実体験も交えながら、命の大切さを教えて下さいました。今日は、そのことについて発表します。
まず、逆さに吊したニワトリの頭を押さえ、首の後ろ側からナイフを入れます。このとき、ニワトリが暴れないように、しっかり押さえなければなりません。中には、恐がって近づかない子や、「かわいそう」と泣き出す子もいました。
解体作業の細かい手順は省略しますが、骨や内臓を除くと、一羽のニワトリから取れる、いわゆる「肉」の部分は意外と少ないことがわかりました。
「肉」は、お昼にバーベキューをして、みんなで食べましたが、「すまないことをした」という気持ちと、「でも、おいしかった」という気持ちが入り混じった、複雑な気持ちがしました。誰一人として残す人はいませんでした。
おじいさんの話では、終戦直後の日本では、生きるための貴重なタンパク源として、たいていの家でニワトリを飼い、卵や肉を食べていたそうです。子供の頃のおじいさんも、かわいがっていたニワトリを、お祭りの日などに、親と一緒に殺したそうです。それはとても辛く、悲しいことでしたが、同時に、「肉を食べる」ということは、「命をいただく」ことだ、と実感できるようになり、肉を「生産」することは、命を「消費」することだ、と考えるようになったそうです。
このように、私たちが食料としているものの「生産」と「消費」は、命を通して表裏一体の関係になっています。しかし、今は便利になって、「生産」の場が日常生活から切り離されています。専門業者がニワトリを飼って卵を作り、殺して肉にし、私たちは、それをスーパーなどで買って「消費」するだけになりました。便利になったことで、「命をいただいている」ということに対する意識が、薄れてしまっているのではないかと思います。
今回の実習は、それを強く実感することができ、とてもよい体験になったと思っています。ただ、同様の実習には、「残酷なことを子供に見せるのはよくない」という親の反対意見も多いそうです。
私は「ニワトリ」にこだわらずとも、それぞれに合った方法で、すべての人が「命をいただいている」ことを実感できればいいと思いました。これで私の発表を終わります。

(3秒おく。)

放送はこれで終わります。解答を書き終わったら、ほかの問題に進みなさい。